

## 人々を楽しませる赤城山の魅力 2. 赤城山をめぐる伝説とそのルーツの考察

栗原 久

東京福祉大学 短期大学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町 2020-1

(2013年11月20日受付、2014年1月9日受理)

抄録: 赤城山は群馬県(上毛野国:かみつけのくに)を代表する山であり、古くから信仰の対象であった。そのため、赤城山にまつわる伝説が数多くある。伝説の中には根拠が定かでないものも含まれているが、地域に根ざした何らかの理由を秘めている可能性がある。本論文で取り上げた伝説は、赤城山の神、龍神・大蛇と水、地名、地形、気象、および下毛野国(栃木県)、常陸国(茨城県)、上総国(千葉県)や会津国(福島県西部)といった他地域との連携・争いなどである。これらの伝説は、古代(古墳時代)から近世(江戸時代)の長年にわたる、赤城山麓の人々の生活や歴史上の出来事に由来しているものと考えられる。

(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 赤城山、伝説のルーツ、歴史上の出来事、上毛野国(群馬県の古代名)

### 緒言

伝説とは様々な地方で語り伝えられた民話に属する物語で、その中で特に、語り手によって「事実を伝えるもの」として語り継がれたものを指している。伝説は、通常は地名や遺跡、地形などの名前の由来を語るものが多く、さらに弘法大師や源義経など歴史上著名な特定の人物や時、場所と深く結びつき、少しは信じてほしいという心持ちを含んで、説明的に語り継がれる。古代の人物にまつわる時はしばしば神話と区別しがたい。

伝説が語る内容は、それが真実であるかどうかはあまり問題にされない。また、神話はその国の由来などを説き、より広い世界を語る点で、実在の人物の行状について語る伝記とは区別されるが、場合によってはその区別が困難なこともある。登場人物が全くの架空であるのか、ある程度の裏付けのあるものかの区別がつかない場合があるからである。

赤城山は群馬県(上毛野国:かみつけのくに)を代表する山であり、古くから信仰の対象であった。そのため、赤城山にまつわる数多くの伝説がある。その一部は根拠が定かでないものがあるが、「火のないところに煙は立たず」の諺があるように、全くのフィクションであるとは断言できず、歴史の中で起こった出来事に由来する可能性が高い。

現在の我々の生活は歴史の積み重ねの上に成り立っていることから、地域に伝わる様々な伝説を洗い出し整理することは、地勢、歴史、文化の現状を考察するうえで意義深いと言える。

本論文では、赤城山にまつわる代表的な伝説を紹介し、そのルーツについて、また現在の状況との関連について、私見を交えて考察する。

### 1. 赤城山と二荒山(日光男体山)の神の争い

二荒山(男体山)は栃木県(下毛野国:しもつけのくに)の代表的な山で、赤城山の神と二荒山の神が争ったとの伝説があり、その多くは土地争いに関係するもの、赤城山周辺の水不足に関連するものに分類される。

#### 1-1. 領地争いに関係するもの

●赤城山と二荒山(日光男体山)の神が領地を争って赤城山の神が勝ち、二荒山の神が流した血で山が赤くなった。(桐生市新里町の伝説)

逆に、二荒山の神が勝って、赤城山の神が流した血で山が赤くなったとの伝承も各地にある。赤城山の名前は、赤城山の神あるいは男体山の神が流した血からつけられた。

●赤城山の神と二荒山の神が領地争いをしたところ、赤城山の神が勝った。二荒山の神が負けて逃げるとき、サツマイモのツルに足を取られて転び、モロコシの切り株で片目を突いてしまった。そのため、下毛野国の人は片目が細い。(片品村の伝説)

●赤城山の神(ムカデ)と二荒山の神(ヘビ)が戦場ヶ原で戦った。当初は、赤城山の神の方が優勢だったが、弓の名手の小野猿丸(猿麻呂)の加勢を受けた二荒山の神が勝利した。勝負がついたのが中禅寺湖畔の菖蒲ヶ浜、赤城山の神が血を流したところが赤沼、勝利を祝って宴を開いたところが歌ヶ浜と呼ばれるようになった。(栃木県日光市の伝説)

●二荒山の主である大蛇は、赤城山の主である大ムカデの攻撃に苦しめられていた。そこで、坂上田村麻呂に助けを求め、ついに退治した。逃げた大ムカデの足跡に水がたまって、片品村の菅沼と丸沼になった。(栃木県日光市・群馬県片品村の伝説)

●赤城山の神と二荒山の神が、お互いの領地のことで争いを起こした。話し合いで決着がつかなかったのどうとう武力で決めることになり、赤城山の神は大蛇に、二荒山の神はムカデに化身して、戦場ヶ原で激しい合戦を繰り広げた。

合戦は最初のうちは、赤城山の神の方が優勢であったが、そのうち二荒山の神がどんどん盛り返してきた。形勢不利とみた赤城山の神は、戦いを止めて現在の老神温泉のところまで撤退した。激しい戦いで赤城山の神は傷を負い、すっかり疲労困憊してしまった。

やっとのことで立ち上がり、地面に弓をたてると、その場所から熱い湯が湧き出し、赤城山の神はそのお湯で傷を治した。そして体勢を立て直すと再び攻撃を開始し、どうとう二荒山の神に再起不能に近い打撃を与えることができた。深手を負った二荒山の神は、すっかり観念して命からがら逃げ帰っていった。

その後、温泉の湧き出した土地は「赤城山の神が、二荒山の神を追い返した」ということから、「追い神」と呼ばれ、さらに赤城山の神は温泉につかりながら年老いるまで過ごしたので「老神」と言われるようになった。また、赤城山の神が二荒山の神を追い返したところは「追い返し」と呼ばれ、「追貝(おっかい)」になった。(沼田市利根町の伝説)

●大昔、神様が天地を行き来して山や川を造っていた頃、日光の二荒山と赤城山の神が激しい争いを起こしてい

た。この神たちは三方の沼の3兄弟に応援を頼んだ。下の沼と中の沼は二荒山の神に味方したが、上の沼は赤城山の姫をめぐっていたため、心ならずも2人とは敵同士にならざるを得なくなった。

戦が始まると二荒山の神が勝利をおさめ、敗れた上の沼は命を落としてしまった。すると、悲しみに溢れ白鳥に姿を変えた姫が上の沼の上空に現れ、沼の中に矢のように突っ込み、命を絶ててしまった。その次の春から、上の沼には白鳥の姿に似た美しい蓮が咲き、ジュンサイが一面に広がるようになった。(福島県喜多方市(旧高郷村)の伝説)

### 考察

群馬県(上毛野国)と栃木県(下毛野国)は、古墳時代は毛野国といって一つの国であった。しかし、自然が豊かで農業生産力が高く、その勢力の増大を恐れた大和朝廷は、仁徳朝(313年~399年)のとき毛野国を2つに分割し、当時の一級国道であった東山道(中山道とほぼ同じルート)を通して都に近い方を上毛野国、遠い方を下毛野国とした。そして、奈良時代になると、国名を漢字2文字で表すことになったので、上毛野国は上野国に、下毛野国は下野国になり、江戸時代になると簡略されて、それぞれ上州、野州とも呼ばれるようになった。

毛野国を2つに分割する際、その境界をどこに引くのが大きな問題となったことは想像に難くない。境界の線引きは、通常は山脈の稜線で大河川の分水嶺を利用するのが普通である。そうすると、毛野国のほぼ中央部には半月峠を挟んで利根川水系の渡良瀬川が南方向に、鬼怒川水系の大谷川が北方向に流れていることから、ここが両国の境界になるのが自然である。しかし、半月峠の南側にある日光市足尾町は栃木県側に含まれている。

現在の利根川は銚子に向かって東進しているが、江戸時代初期は現在の江戸川が利根川本流で東京湾に注いでいた。一方、現在の銚子で太平洋に注ぐ利根川下流域は、元々は鬼怒川であった。つまり、古代から江戸時代初期までは、利根川水系と鬼怒川水系は全く異なる水系であり、両河川の文化的基盤は異なっていたのである。

上毛野国と下毛野国の領地争いを、それぞれの国における信仰の対象である赤城山と二荒山の神の争いとして抽象化して表現し、負けた上毛野国の軍隊が敗走したため、足尾地区が下毛野国に含まれていることになった考えることができる。

一方、片品・利根地域では、いったん退却した上毛野国軍が体勢を盛り返して、追走してきた下毛野国軍を押し返したため、金精峠が両国の境界になったと考えられる。また、



写真1. 老神温泉大蛇祭り(5月7・8日に開催)

地名は、まったくでたらめにつけられたのではなく、何らかの歴史的背景を持っている場合が多い。奥日光周辺や沼田市利根町の地名は、上毛野国と下毛野国との争いに由来するといえる。

赤城山の神がムカデに、二荒山の神が大蛇に化身したとの伝説は、後に述べる藤原秀郷(俵藤太)のムカデ退治の伝説と関係すると思われる。つまり、戦に負けて足尾地区を奪われた上毛野国側がムカデで、勝った下毛野国側が大蛇ということになる。

一方、片品・利根地区では、一時は形勢不利であった上毛野国軍が最終的には下毛野国軍を追い返しているため、勝者とすることができる。そのため、金精峠直下の菅沼・丸沼付近では、赤城山の神がムカデで、二荒山の神が大蛇であるが、沼田市利根町になると逆転して、赤城の神が大蛇で、二荒山の神がムカデになったのであろう。

なお、この伝説にちなんで、老神温泉では、5月7・8日の温泉祭り、通称「大蛇祭り」では、粋な芸妓衆や若衆が長さ25mの大蛇2匹を担いで温泉街を練り歩く(写真1)。2013年は干支が蛇であったため、5月の温泉祭りでは普段は倉庫に保管されていた全長108mの大蛇が登場した。そして、この大蛇みこしは2013年5月、「世界で最も長い大蛇みこし」としてギネスブックに登録された。

一方、日光中禅寺湖畔の二荒山神社中宮(下野国一之宮)では毎年1月4日、平安時代から行われている神事(武射)があり、「ヤアー」の掛け声をしながらか赤城山に向かって矢が放たれる(写真2)。



写真2. 二荒山神社中宮の武射(1月4日に開催)

最後に紹介した、福島県喜多方市に伝わる「三方の沼の白鳥」の伝説は、かなり古い時代から、上毛野国や下毛野国と会津国との間で、人的交流が行われていたことを示している。下毛野国と会津国の間は山王峠を越える会津街道によって比較的容易に交流できたが、上毛野国と会津国の間を結ぶ沼田街道は尾瀬を通るため、通行は雪のない時期のみに限られていた。交流の密度を考えれば、会津国が上毛野国ではなく下毛野国側に味方したのは当然といえよう。

坂上田村麻呂は、平安時代に蝦夷討伐のため都から派遣された武将であるが、上野国と下野国との争いのときに、下野国を応援したのであろう。

## 1-2. 赤城山周辺の水不足に関連するもの

●赤城山の神と二荒山の神は、赤城山の沼をめぐるいつも仲違いしていた。二荒山の神が「この沼は私のものだ」と言うと、赤城の神は「おまえの方にちゃんと大きな沼(中禅寺湖)があるではないか。どうしても欲しいなら腕づくでこい」と言い、戦は絶えなかった。

いざ戦になると、赤城の神の方が強いので、二荒山の神はたびたび負かされてしまった。二荒山の神はいろいろ考えた末、鹿島の神の応援を頼むことにした。すると、鹿島の神は、弓の名人であった猿麻呂(小野猿丸)を紹介した。

猿麻呂はあまり乗り気でなかった。しかし、あるとき、猿麻呂が得意の弓で狩りをしていると、目の前に大きな鹿があらわれた。猿麻呂は弓に矢をつがえて追いかけたが、その鹿は山を越えて逃げてしまい、二荒山の山中に入って姿を消してしまった。まもなく、猿麻呂の前に品のある中年の女性が現れ、「私は二荒山の神で、鹿に姿を変えてあなたを呼んだのです。ほんとのことを言うと、あなたは私が奥州にいたとき生んだ子供なのです。私を苦しめている

赤城山の神がムカデに化身してやってくるので、やっつけて欲しい。私たちはへびに化身します」と言った。自分の出生の秘密を知った猿麻呂は、二荒山の神を応援することにした。

激しい戦いになったが、猿麻呂が放った矢が大ムカデの左目に当たった。赤城山の神は急所を射抜かれて我慢ができず、退却しはじめた。猿麻呂は赤城山の神を利根川の近くまで追いかけたが、赤城の神は命からがら逃れて、利根川端の森蔭に隠れて命は助かった。この激しい戦いで流れた血のため、野も山も真っ赤になってしまった。そこで、激戦のあったところの山は赤城山と呼ばれるようになった。(栃木県日光市の伝説)

\*注:奪い合った沼は「中禅寺湖」であるとの伝説もある。

●赤城山の仁王が水不足を解消しようと中禅寺湖に盗みにいったが、二荒山の仁王に見つかってしまった。最初に左手を掴んだので右手で水をすくって放り投げたのが大沼になった。仁王はあわてて左手を離して右手を掴んだので、左手で水をすくって放り投げたのが小沼になった。(みどり市の伝説)

●赤城山の神が99ある谷を1つ増やして100にしようと二荒山に取りに行ったところ、二荒山の神に見つかってしまい、それぞれムカデとへびに化身して戦った。戦は二荒山の神が勝ち、赤城山の神は陸稲の藁で縛られてしまった。それ以来、赤城山周辺では水不足で、陸稲が作付けできなくなった。(前橋市富士見町の伝説)

●弘法大師が修行の霊場を開山するため、一山百谷存在の霊場を求めて赤城山を訪れて山中を探したが、杉の坊(荒山)に隠れて九十九谷しかなかったので、諦めて下げていた手鍋を投げ捨てて赤城山を去った。その鍋が割れて被さったのが鍋割山だという。(群馬県前橋市の伝説)

## 考察

### 1) 赤城山麓の水利について

火山の裾野は水の浸透性が高く、保水性に乏しいので、そのような場所はいつも水不足に悩まされてきた。赤城山麓でも例外ではなく、古くから農業用水の確保に苦労したようで、水にまつわる伝説が多数存在することは当然のことと言える。赤城山頂の大沼の湛水量は約800万 $m^3$ であり、中禅寺湖の湛水量2億5,100万 $m^3$ と比較してはるかに少ない。そのため、中禅寺湖の水を上毛野国に運んで利用したいという願望が強く、水取り合戦の伝説が生まれたのであろう。

稲作は、当初は河川の周辺に限られており、稲作ができる土地を増やすために、上野国の住民が下野国に進出しようとしたが、土地争いに負けた可能性が高い。これが、赤城山の谷を99から100に増やそうとしたが、二荒山の神に見つかって戦に負けたという伝説になったのであろう。

当然のことであるが、赤城山麓の水不足に対する対応が、以下に述べるように、稲作が盛んになった平安時代から現代に至るまで取り組まれてきた。

### ●女堀

小沼(湛水量約35万 $m^3$ )から発する粕川は、赤城山の裾野の末端にあった淵名荘(伊勢崎市境上淵名町付近)の重要な水源となっていたが、水量は十分でなかった。さらに、1108年の浅間山大爆発による大量の火山灰や軽石の降下によって被害を受けた水田を蘇らせ、新たな水田を開くために、平安時代末期(12世紀半ば)に新たな農業用水路が計画された。これが女堀である。

淵名荘の地域の支配者だった淵名氏は、前橋市上泉町(海拔97m)付近を流れていた利根川(現在の桃の木川)から淵名荘の東端を流れる早川まで用水路を掘削し始めたが、工事は未完成に終わった。女堀の名称は、役にたたないことを意味する「姥」(おうな、老女)に由来するという。

女堀は未完成に終わったが、予定路線の全てにおいて、約100mの間隔を置いてほぼ同時に掘削が行われたようで、前橋市堀之下町から終末点の伊勢崎市西国定(海拔90m)に至るまでの約13kmにわたって、幅15~20m、深さ3~4mの掘削跡と、土砂を積み上げた堤跡が点々と残っている。一部は国史跡に指定され、伊勢崎市下触町では、女堀跡が赤堀しょうぶ園として整備保存されている(写真3)。



写真3. 女堀跡(伊勢崎市下触町の赤堀しょうぶ園)

### ●南麓の溜池群

古くから赤城山南麓では水不足が深刻であったため、江戸時代になると、香川県讃岐平野にも劣らないほど多数の溜池が作られた。現在ある赤城山南麓の溜池は湧水池利用のものが多く、それぞれの成立年代は不詳であるが、153個が点在している。しかし、最大の溜池である1952年完成の寺沢ダム(高さ14.5m)であっても、貯水量は13.7万 $m^3$ (有効貯水量11.5万 $m^3$ )に過ぎない。溜池群の総貯水量は約401万 $m^3$ 、受益面積は約1,510haであるが、それぞれの溜池は小規模で、受益面積は5ha以下のものが30%もあり、10ha以下のものになると65%以上にも及ぶ。そのため、大量の水を使う稲作は小河川沿いで細々と行われていただけで、次に述べる大正用水が完成するまでは大部分の土地は畑地や桑園、あるいは原野であった。

### ●大正用水

1947年には、渋川市北橘町箱田で利根川から取水(最大取水量は毎秒4.17 $m^3$ )して、伊勢崎市香林町の早川に至る全長24kmの大正用水が完成し、海拔145m～135mより低い流域約1,600haを潤した。しかし、これより標高の高い地域の開発はほとんど手がつかず、畑や原野のままであり、新たな用水の建設が望まれた。

### ●群馬用水

群馬用水は、利根川上流の八木沢ダム(1967年完成:貯水量約2億430万 $m^3$ 、有効貯水量約1億7,580万 $m^3$ )の建設と関連して1972年に完成し、さらに奈良俣ダム(1990年完成:貯水量約9,000万 $m^3$ 、有効貯水量約8,500万 $m^3$ )によって増強された大規模用水(導水路6km、赤城幹線33km、榛名幹線24km)である。沼田市岩本町の利根川から取水(最大取水量は、農業用が毎秒14.2 $m^3$ 、水道用が4.629 $m^3$ )し、受益面積は約7,500haに達する。群馬用水赤城幹線は、取水地点の海拔270mから最終地点の海拔230mにある早川ダム(みどり市大間々町桐原:貯水量約120万 $m^3$ 、有効貯水量90万 $m^3$ )の間を通水しているが、その水の一部は海拔約450mまでポンプアップされている。群馬用水の完成により、赤城山南麓の農業用水不足はほぼ解消された。

### ●赤城大沼用水

大沼の水は沼尾川となって渋川市赤城町に流れ下がっているが、勢多郡富士見村(現 前橋市富士見町)の水不足を補うため、船津傳次平の構想から80余年を経た1957年、赤城大沼用水(受益面積381ha)が完成した。赤城大沼用水は、沼尻に水門を設けて大沼の水位を調節し、地蔵岳直下の赤城白川までトンネルを掘って導水し、箕輪の地点で取水している。

### ●赤城西麓用水

赤城山西麓地区の水不足に対しては、1998年、利根川に取水口を設けてパイプラインによって導水し、取水地点より高位置までポンプアップする赤城西麓用水の完成で解消された。赤城西麓用水は2,400haの畑地を灌漑し、かつて一面の荒野であったこの地には豊かな畑作地帯が広がっている。特に、昭和村のレタスは有名である。

#### 2) 赤城山と二荒山の神をめぐる伝説について

二荒山の神が鹿島の神に相談したこと、さらにその紹介で猿麻呂の応援を受けたとの伝説は、下毛野国と常陸国間の協力関係を示している可能性がある。鹿島神宮は常陸国(茨城県)の一宮である。

二荒山の神が奥州にいたときに生んだ子どもが猿麻呂であるということは、下毛野氏のルーツが奥州(蝦夷地)にあることを示唆している。赤城山を信仰対象にしている上毛野氏が崇神天皇の第一皇子である豊城入彦命をルーツにしており、都から派遣された人々と、先住していた蝦夷地あるいは土着の人々との間で対立関係があったことがうかがえる。

#### 3) 弘法大師伝説について

日本各地にある弘法大師にまつわる伝説の一つで、赤城山の西端にある側火山の鍋割山形状、前橋方面からは赤城山最高峰の黒檜山が荒山に隠れて見えない位置関係、霊場開拓、水を結びつけたものといえます。

また、杉の坊は、赤城山の天狗を取り仕切る大天狗との伝えもあり、先住グループが新たな宗教の進出を妨害したという解釈もできる。

## 2. 大蛇・龍

### 2-1. 赤堀道元の娘

佐波郡赤堀村(伊勢崎市赤堀地区)に、赤堀道元という長者が住んでいた。道元夫婦には子供がなかったので、赤堀明神に祈ったところ、1人の娘を授かった。

娘はすくすくと、美しく育ったが、普通の子供のように外に出て遊びまわるでもなければ、悪戯するでもなく、一人静かに過ごすことが多かった。そこで、両親は、かわいい一人娘をどうにかして普通の子供のように、元気に成長させたいと、いろいろ手を尽くした。しかし、娘の様子は変わらないか、かえってひどくなるばかりだった。

16歳になった春の頃からは、毎日、窓辺に出ては、赤城山をじっと見つめて、物思いにふけるようになった。その頃、不思議なことに、時たま、娘がいつもいる居間の辺りから、

黒雲がわくことがあって、両親は大変心をいためていた。

4月になると、娘は、赤城山へ登りたいと、明けても暮れても言い出した。娘がそれを言い出すと、今までよく晴れていた空がにわか曇り、雲が激しく行き来して風が巻き起こるようになった。あまり娘が熱心なので、ついに両親もこの願いを聞き入れることにした。

いよいよ、娘は赤城山に登ることになり、娘のまわりには大勢の腰元や、乳母がつき、お伴も勢揃いした。

途中、月田(前橋市粕川町月田)の近戸神社のそばの石に腰掛けたところ、乗っていた馬が急に病みだしたので、鞍をその石に掛け、駕籠に乗り換えて行った。これが近戸神社に残っている「鞍掛石」である。

娘を乗せた駕籠は、赤いツツジが咲き乱れる景色を眺めながら、山頂を目指して登っていった。行く手の野山には霧が立ち込め、彼方の谷には雲がわいていて、この日の赤城山は、遠い昔に返ったように静まりかえっていた。

駕籠は山の上の小沼の畔に到着した。そのとき、太陽は雲に隠れて雨が降り出し、雲は慌ただしく飛び交い、辺りの木々は風を呼び、沼の水面には大波小波が立ち騒ぎ、山は荒れに荒れてきた。

すると、娘が急に、「水が飲みたい」と言って、沼に近づいたかと思うと、いきなりザブンと底知れない沼に飛び込んでしまった。お伴の者は、驚くばかりで、手を差し出す暇もなかった。

水面はいつそう荒れてきた。そして、沼の真ん中から、「私は召されてこの沼の主になります。今まで育ててくださったお父様、お母様に、よろしくお伝えください」、いう娘の声がした。

娘は、もともと、小沼の主の龍だったのである。あつけにとられたお伴の腰元たちは、このままでは帰ることができないと皆が沼に入水してしまい、カニになった。このカニのことを「腰元ガニ」と呼んでいる。また、娘の遺骸だけでも見つけようと、沼を取り囲む山の一部を切り崩して水を流したのが、今の粕川になったという。

娘を失って深く悲しんだ長者はがっかりしてしまったが、よくよく考えて見ると、姫がしきりに赤城登山を願ったこと、生れた時に腋の下に鱗のようなものが生えていたことなど、それからそれへと思い当たることが多かった。道元はとうとう「姫は小沼の主が、人の世界に化けてきたものだったのだ。いまそれが元の水中に帰ったのだ」とあきらめるようになった。赤堀家では、その後、娘の命日には、赤飯を炊いて、重箱に詰めて沼に捧げるようになった。重箱を小沼の岸辺に置くと、波に引かれて沼の中央に行き、やがて空になって返されるが、その中には、必ず、龍のウロコが入っていたということである。

このことから、昔は、赤城山麓では、16歳の娘の登山は避けていた。どうしても登る場合は、子ガニを巾着の中に入れて沼に放つか、自分の身代わりとして鏡を投げ入れるようになったとのことである。

桐生市旧黒保根村の医光寺に、赤堀道元の娘が、沼に入る前に置いていったと伝えられる「道元娘の帯」が保管されている。(伊勢崎市赤堀地区の伝説)

赤堀道元の娘の伝説にはバリエーションがある。例えば、赤堀道完(=道元、道玄)の娘が徳川家康の旗本の小菅又三郎の内室となったが、赤城明神に参拝に行くと小沼の辺ですざましい数のムカデが現れて沼の中に引き入れてしまった。その後、内室は沼の主、龍蛇の姿になって現れたという。

## 2-2. 大蛇の子を宿した娘

赤城の沼からどの位離れた所か知らないけれど、いい娘がおった。娘は蛇に恋いこがれてしまい、蛇の子どもをみごもってしまった。娘はどうしたらいいかおばあちゃんに相談した。そうしたらおばあちゃんは、「蛇には紺が毒だから、針に紺の糸をさして、相手が夜に通って来たら、着物にその針を刺してやれば、紺の毒で死んでしまう」と、教えてくれた。娘はさらに「自分のからだはどうしたらいいのか」と聞いたら、おばあちゃんは「五月の節句にしょうぶを屋根にかざって、よもぎ、しょうぶのお湯をたててはいると、子どもは墮胎してしまうから、そうした方がいい」と教えてくれた。(片品村の伝説)

## 2-3. おおみ堂の釣鐘

昔、溝呂木(みぞろぎ)(渋川市赤城町)のおおみ堂に、みぞろヶ池があった。池の主である大蛇が成長して池が小さくなったので赤城山の小沼に移ったが、そのとき嵐が起これり、小沼の水が溢れて流れでてしまった。大水によっておおみ堂の釣鐘も流されてしまったが、これが筑波山の麓に流れ着いた。今もこの鐘を突くと、「溝呂木恋しやゴーン」と鳴るといふ。(渋川市赤城町の伝説)

## 考察

大蛇や龍神は縄文時代に稲作とともに中国から伝来した。そのため、稲作に必要な水源となる湖や沼には、大蛇や龍神に化身した娘が成長して元の沼に戻り、お供の腰元がカニになって探すとの伝説が多い。

2-1)の伝説の地である赤堀には、赤城山頂の小沼を水源とする粕川が流れている。赤堀道元の娘の伝説は、赤城の神と二荒山の神の争いの伝説とともに、貴重な水源である小沼を龍神が守っているとして、水に対する感謝の思想が

込められているといえる。

また、今日の小沼は開けて明るくなっているが、以前は訪れる人も少なく、原生林に囲まれてひっそりとしていた神秘的な湖であり、道が整備されていない時代の赤城登山は危険で、若い女性は登ってはいけないという戒めだったといえよう。

赤堀氏は、近江国の三上山を7回半も巻きついた大ムカデを退治した藤原秀郷(倭 藤太)を祖としている。多数のムカデが現れて道元の娘(小菅又三郎の内室)を小沼に引きずり込んだという伝説は、藤原秀郷に滅ぼされた豪族の子孫が、秀郷流の赤堀氏に対する反対勢力として残存している可能性を示唆している。なお、伊勢崎市今井町の宝珠寺墓地には、藤原秀郷、赤堀道元(道玄)、小菅又八郎のものといえられる墓がある。

すでに述べように、赤城山の北の利根・片品地区では、赤城山の神は大蛇であり、二荒山の神はムカデである。2-2)が片品村の伝説であるとする、この地域の娘が蛇に言い寄られてやむなく身ごもってしまった娘の困惑と、それに対する拒否反応を示していることは地域的に矛盾がある。この伝説は、下毛野国(栃木県)の伝説が片品村に伝わってきた可能性がある。

小沼の龍(大蛇)伝説は、赤堀道元の娘の伝説以外にも多数あり、2-3)のおおみ堂の釣鐘もその1つといえる。

ただし、小沼の水は粕川となって南に流れ出ており、小沼の水があふれ出ても、西麓にある溝呂木で洪水が発生するとは考えにくい。常陸国(茨城県)まで溝呂木の釣鐘が到達するような洪水・氾濫が発生したと考えられる出来事としては、平安時代(1108年)にあった浅間山の天仁大噴火(噴出量は約30億トンで、山頂の前掛カルデラを形成)に伴う泥流が挙げられる。しかし、利根川の流路は、江戸時代初期までは現在の江戸川であり、銚子に向かう流路は、もともと鬼怒川であった。これらのことから、利根川の洪水説は多くの矛盾がある。むしろ、夏になると赤城山で発生した雷雲が東に流れて栃木県や茨城県に恵みの雨をもたらすが、雷鳴と水の恵みをおおみ堂の釣鐘を例えて、感謝している可能性が高いと考えるのが妥当である。

なお、渋川市赤城町溝呂木は赤城山南西麓にあり、前橋(厩橋)と沼田を結ぶ沼田街道の第2の宿場である。

### 3. 淵名姫と赤城姫(赤城大明神)

履中天皇の時代(400年~405年)、上野国勢多郡に流されていた高野辺左大将家成には、3人の娘と1人の息子がいた。息子は母方の祖父を頼って、都へ上がり仕官していた。

大将の奥方が亡くなり、信濃国更科の地頭更科太夫の娘

を後妻に迎え、一人の娘ができた。その後、罪を許された大将は上野国司に任命され、任地に向かった。そして前妻の3人の娘の嫁ぎ先を探し、姉は淵名姫で淵名次郎家兼に養われて「淵名荘」に、中の姫は赤城姫で大室太郎兼保の宿舎に、末の伊香保姫は群馬郡の地頭である高光中将(伊香保太夫)の処に嫁いだ。

このことが継母とその娘に妬まれ、継母は3人の娘の殺害計画をたてて、弟の更科次郎兼光をそそのかした。兼光はまず、姉の淵名姫を淵に沈めて殺してしまった。次女の赤城姫は赤城山に逃げ込み、赤城の沼の龍神(唵佐羅魔女:おんさらまによ)に助けられ、その後を継いで赤城大明神となった。末娘の伊香保姫は、伊香保太夫の居城にいて護られた。

事件を知った大将家成は慌てて戻り、淵名姫の亡くなった淵で姫の亡霊と再会したが、嘆き悲しんで淵に入水してしまった。

都で出世していた大将家成の息子は、軍勢を率いて上野国に戻り、兼光を殺して継母らを抑えつけた。しかし、血のつながりはないが仮にも一時は母であったという理由で、殺さずに、継母の出身地・信濃更科へ追放した。信濃に戻った継母は甥を頼るが、山に捨てられて死んでしまった。甥が叔母を捨てた山から、姨捨山と呼ばれるようになった。

事件を全て收拾させた大将家成の息子は、淵名姫の死んだ淵に社を建てた。そして、大沼の湖畔で、神となって一羽の鴨の羽に乗った淵名姫、赤城大明神になった赤城姫と再会した。その鴨が大沼に留まり島となったのが、現在の小鳥ヶ島だという。

その後、息子は小沼の近くに社を建てて祀り、3日間滞在した。その地が三夜沢という。(群馬県・長野県の伝説)(萩原 進著:温泉伝説の群馬より(一部改変))

#### 考察

淵名姫と赤城姫の伝説は、赤城山頂にある赤城神社元宮の祭神である赤城大明神の由来を述べている、飛鳥時代のものである。上毛野氏を祖として、赤城南面の城南地区を支配する大将家成の長女が赤城山を下った淵名荘に嫁いだということは、赤城山山頂の小沼を源流とする粕川が淵名荘を流れて当地の田畑を潤していたことと無関係ではないだろう。先妻がいたころは、上流で畑作が中心だった大将家成側と下流で稲作を行っていた淵名氏側とは、水を奪い合うことなく関係はうまくいっていたが、信濃国から後妻を迎えたことで稲作がさかんとなり、上流で水を使うようになったため、両者の関係がうまく行かなくなり、断絶状態になったと考えられる。これが、淵名姫の殺害として伝わっているのであろう。

一方、大将家成が信濃国更科太夫の娘を後妻に迎えているように、上野国と信濃国との関係があったこともうかがわせる。実際、赤城神社の境内に信濃国の諏訪神社が併祀されている例が多い。また、稲作を中心とする生産性の高い農業技術は、信濃国から移住してきた渡来人によってもたらされたと考えられている。

また、末娘が伊香保太夫に嫁いだということは、榛名山東麓(渋川市有馬から吉岡町付近)を支配地域とし、伊香保嶺(榛名山)を信仰する伊香保太夫(=有馬氏)との密な関係を示唆している。高光中將は榛名山中腹にあり、1,300年余の歴史を持つ水澤寺(水沢観音)を創建した人で、本尊の千手観世音は伊香保姫を救った持仏の十一面千手観世音菩薩と伝えられている。

淵名姫殺害の悲しい伝説にちなみ、8月の第1土・日曜日に開催される赤城山夏祭りでは、ミス淵名姫・赤城姫のコンテストが行われる。

## 4. ダイダラボッチ・大男

### 4-1. ダイダラボッチの休み跡

昔々、ダイダラボッチという大男がいて、赤城山に腰を掛けて利根川で足を洗った。キセルを叩いた灰が丸山で、吉沢にある池が足跡だという。(太田市の伝説)

### 4-2. 榛名富士を造ったダイダラボッチ

ダイダラボッチは山造りが大好きな巨人で、榛名山や赤城山に腰かけて利根川で足(脛あるいは禪という説もある)を洗ったと伝えられている。富士山も造ったが、掘った穴が琵琶湖であるとか、甲府盆地であるという。(高崎市旧榛名町の伝説)

### 4-3. 上野国と駿河国の大男

赤城山に腰掛けていた上野国の大男に駿河の大男(天狗と刷る伝えもある)が力比べを持ちかけ、一晚のうちに大きなモッコで土砂を運んで山を造る競争をすることになった。駿河国の大男が造ったのが富士山で、上野国の大男が造ったのが榛名山である。上野国の大男が山を造るとき、最後のモッコ1杯分の土砂を積み上げる直前に夜が明けてしまったので、がっかりして下に落としてしまった。そのため、榛名富士は富士山より低いのである。最後に榛名富士のそばに落とした土砂がヒトモッコ山である。(高崎市旧榛名町の伝説)

### 4-4. 赤城山の赤鬼と榛名山の青鬼の山造り

赤城山の赤鬼と榛名山の青鬼が、夜明けまでにどちらが

大きな山を造れるか競争しようということになった。赤鬼も青鬼も夜明け近くまで、どんどん土を運び続け、どちらも負けられないような大きな山を造ったが、青鬼が最後の土を運ぶ途中で夜が明けてしまい、赤鬼に負けてしまった。

山頂まで運びそこねて途中で投げ出した土が、榛名山の東側、つまり赤城山に最も近い所に聳えている「モッコ山」、今の名を「水澤山:浅間山」だという。(渋川市旧伊香保町の伝説)

## 考察

東日本では、関東一円を中心に『常陸国(茨城県)風土記』に登場するダイダラボッチをダイダラボッチと呼んでいる。別名に、デイダラボッチ、ダイランボウ、デイランボウ、ダイダラボウ、ダダボウ、デュラボッチ、ダイラボウ、デーデーボ、ダダボウシなどがある。ダイダラボッチの「ダイ」はアイヌ語で「小山」、「ダラ」は「担ぐ」という意味があり、ボッチは「法師」に由来し、大太法師と書くこともある。

関東甲信一帯では、大きな火山とその付近の湖などにまつわる伝承が比較的多いのが特徴である。ダイダラボッチは山造りが好きであるが飽きやすく、標高が低い山では途中で投げ出した、山頂部に多数のピークを持つ山では山造りをしている途中でかんしゃくを起こして蹴飛ばした、といった伝説が各地にある。

近畿地方の伝説では、ダイダラボッチは一目連(ひとめむらじ)の俗称となっている。ダイダラボッチ伝説は「紀伊山地の霊場と参詣道」を中心に、三重県、奈良県、和歌山県にまたがり、伝説の出発点を奈良の都(飛鳥京または平城京)とし、熊野山中から熊野灘沿岸を通り、志摩半島を経て桑名郡に存在する多度大社に天目一箇神(あめのまひとつめのみこと)として祀られている。別名に、ダングラボッチ、デイタラボッチ、一本踏鞴(たたら)などがある。

近畿地方に伝わるダイダラボッチは、「片目・1本足であり、踏鞴を操り、風を起こす者」といわれているが、蛇の姿をして暴風を起こす神としても祀られている。また、天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)、すなわち後に草薙剣(くさなぎのつるぎ)と呼ばれる剣を造ったとされ、なおかつ一目連とされている。これらの伝承のルーツは、踏鞴製鉄が盛んであった出雲地方に伝わる巨人神の神話、つまり国引き神話に登場する巨人神、八束水臣津命がその原型といわれている。

播磨国(兵庫県)風土記の託賀郡(多可郡)の条には、常陸国風土記の伝説と似た、ダイダラボッチの足跡が数多くの沼になった大人(おおひと)伝説が記されている。古来、同郡は銅生産が盛んで天目一箇神が祀られているように、巨人・独眼・鍛冶の関連を示唆している。



ダイダラボッチが片目であり踏鞴製鉄と関連づけられているのは、踏鞴製鉄では融解した鉄の温度を色で判断していたため、強力な光と熱によって網膜が傷ついてしまい、独眼となってしまふからだといわれている。ギリシャ神話の火山、鍛冶の神へパイストスに仕えるキュクロプスも独眼とされている。

伝説4-1で登場する丸山は、太田市北部の丸山町にある周りから独立して高さ40mほどの小山で、頂上に丸山薬師が祀られている。北斜面にはカタクリの群落があり、毎年4~5月に赤紫色の花を咲かせる。

伝説4-2、伝説4-3は榛名山に関する伝説であるが、赤城山が登場するので紹介した。

赤城山と榛名山はともに約50万年前から始まった火山活動で造られ山頂にカルデラを持つ、形状もよく似ている成層火山である。榛名富士は榛名山の山頂カルデラ内にある溶岩ドーム(中央火口丘)で、水澤山は榛名山の東面にある溶岩ドームの側火山である。

## 5. 巨人・天狗と気象

### 5-1. 赤城山に腰を下ろし一休みした巨人の足跡

青い空がどこまでも果てしなく澄み渡り、雲1つない秋の昼下がりであった。村人たちは、田んぼの畦に吊した稲束の干上がり具合をみたり、麦まきの段取りをししたりと、野良仕事に精をだしていた。

昼の休みが終わり、村人たちが再び野良仕事に取り掛かってから、一時もたつた頃だった。それまでサンサンと降り注いでいたおだやかな陽射しが、突然さえぎられたのである。村人たちは、このだしぬけの異変に、皆が仕事の手を休めて、「おや？」というふうに、空を見上げた。そして、空を見上げた村人たちは、あまりの状況にびっくり仰天し、クモの子を散らしたようにその場から、一目散に逃げ出した。中には、農具を放り出し、悲鳴を上げて逃げまどう人さえ見られるほどだった。日陰を作ったのは雲でなく、なんと雲突くような巨人だったからである。

一瞬にして村内には一人も姿が見られなくなり、巨人の大きな黒い陰だけが、村を薄暗くして伸びるだけになってしまった。巨人は桐生川の東の連山を一跨ぎして、たった今、相生の村に足を踏み入れてきたのだった。

巨人はそのまま村を通り過ぎる予定だった。ところが、村に入って見たら、小さな人間どもが一心に野良仕事に精を出している様に出くわしたのである。その動きが巨人には物珍しかったため、しばしばたずんで仕事ぶりを見物しはじめたのである。日陰はこうしてできたのだった。巨人はまったく、村人たちに危害を加えるつもりはなかった。

実は、巨人は長旅を続け、相生村に入ったときは大変疲れていた。村人たちの野良仕事に励んでいる様子を見て、一時は疲労を忘れて元気を盛り返したのですぐに出発しようとしたものの、予定を変えて、ここで一休みしたい気持ちになったのである。

しばらく辺りを見回していた巨人は、やおら北の方面へ数歩足を運ばせた。巨人の歩む方向には、赤城山が長い裾野を引いてそびえ立っていたが、巨人から見ると、膝小僧ぐらいの高さに盛り上がった小山に過ぎなかった。巨人は、その赤城山に近づくと、山頂にドスツと腰をおろした。赤城山を休憩用の椅子にしたのである。赤城山に腰をおろした巨人は両手でほほ杖をついて、今度は足尾山系や、紫にけむる秩父連山の秋色にみとれた。

半時ほど休むと、巨人はスックと腰を上げ、軽い足取りで、太陽の傾き始めた西の山を一またぎして、夕陽の彼方へと、巨大な姿を没していった。

村人の度肝を抜いた巨人の突然の来訪・・・それだけに巨人の去った後の村内は、まさに台風一過以上の騒ぎだった。しかし、巨人が何らの危害を加えなかったので、村内がもとの静けさを取り戻すのに、それほど多くの時間を必要としなかった。ただ、クッキリと残された巨人の大きな足跡は、この村人と巨人と出会った証拠として残り、足跡の話は子孫への語り草とされたのである。

赤城山という豪華な椅子を使ったせいか、疲れの癒えた巨人の両足には、立ち上がる時に予想以上の力が加わったのであろう。巨大な2つの足跡が、相生村訪問の記念(?)として刻まれたのである。

村人は、やがて、この巨人の足跡の地を「足下(あしした)」、両足の間の地を「足中(あしなか)、現在の足仲」と呼びようになった。(桐生市の伝説。清水義男著:黒弊の天狗より。一部改変)

### 5-2. 赤城山の巨人と河童

赤城山に巨人が住んでいて、鍋割山に腰をかけて、白川で足を洗っていた。巨人は、やがて雲になって天に昇っていった。今でも巨人がたくさん慈雨を降らせてくれるので、赤城山には元気になる泉が何ヶ所もわき出しているのである。そして、長い年月が過ぎて人が住むようになった里山には、やがて霊泉を求めて河童もやってきた。

村のお爺さんを助けて畑仕事をしてくれた河童が竜に飲み込まれてしまったことを哀れに思い、村人達が祠を建ててお祭りをした。しかし、そこは水が無く、商売の騒音もひどかったため、いつの間にか祀られた河童大明神は旅立って消えてしまった。

ある日、竜ノ口川に河童が戻ってきた。すると不思議なことに、家出して行方不明だった息子が戻ってきたり、見つからなくなっていた母親の形見が突然見つかったりと、皆が驚いたり喜んだりした。これは、河童の御利益だということになり、小川の畔に神社を建てて祀った。ところが、また、人間のゴタゴタが始まり、河童は旅立ってしまった。(前橋市富士見町の伝説)

### 5-3. 赤城山のへっぶり鬼

たいそう昔、赤城山にはたくさんの鬼がいた。その中にとても強い鬼が2匹(赤鬼と青鬼)いて、互いに自分の力を自慢していた。

2匹の鬼はこれまで何度か戦ったが、いつも勝負がつかなかった。そして、今年もまた、2匹が勝負する日がきた。その年は、いつになく山芋がたくさん採れた。鬼は山芋が大好きで、赤鬼と青鬼は、それぞれ内緒で、勝負の前にたらふく食べた。たくさん山芋を食べたから、プー、プーと、所かまわずおならがでた。

いよいよ勝負の相撲が始まった。2匹の鬼は土俵の上に登り、ガシッとばかりにぶつかりあった。ところが、そのまま動かない。それぞれの鬼は、ひたすらおならを我慢していたのだった。ちょっとでも動いてプーとおならをしてしまえば力が抜け、勝負に負けてしまう。ここで力を抜くわけにはいかない、と2匹とも考えていたのである。

組み合ったままだでも動かないので、行司が大きな声で「ハッケヨイ」と気合いを入れた。その瞬間、我慢を重ねていたおならが一気に噴き出した。グオーッと大きな音を立てたおならは山全体を揺るがし、周りのものすべてを吹き飛ばしてしまった。それだけではなく、2匹の鬼は、その勢いで空高く舞い上がり、しばらくしてから落ちてきた。赤鬼は尻から落ちて大きい穴を造った。これが赤城山の大沼である。青鬼は頭から落ちて小さな穴を造った。これが小沼である。

2匹の鬼の勝負は今でも続いていて、秋には山で採れた山芋をたらふく食べるので、冬になると大きなおならを吹き鳴らしている。それが「赤城のからっ風」である。(渋川市赤城町の伝説)

### 考察

伝説5-1の巨人は、巨大な雲(積乱雲)のことと思われる。ただ、赤城山で発生した積乱雲は、普通は東に流れるので、台風の雲を意味する可能性もある。足跡は大量の降雨で造られた水溜を指すのであろう。この伝説の舞台である足仲は、現在では町名変更のため相生町二丁目となっているが、県営「足仲団地」や「足仲児童公園」に名をとどめている。

伝説5-2は、ダイダラボッチ伝説のバリエーション、赤城山山頂にわきあがる積乱雲と、赤城山麓の湧水が結びついた伝説といえる。水の乏しい赤城山麓では、湧水は貴重な水源であり村民で分け合って利用していたため、豊かな生活を送れるようになってきたことであろう。しかし、次第に利己的行為が多くなって人々の間で醜い争いが始まり、豊かさが失われてしまったことを、河童の行動に例えて戒めていると考えられる。竜ノ口川は鍋割山を源頭とする小河川であるが、水の乏しい山麓では貴重な水資源となっている。赤城山頂に向かう県道4号線と第2南面道路の交差点からわずかに東に向かった竜ノ口川辺に、河童を祀る小さな祠がある。

伝説5-3は、収穫の秋を過ぎると、赤城山からからっ風が吹き始める。その原因を、鬼が山芋を食べておならをしているためと、また、山頂にある大沼と小沼は上空から鬼が落ちてできたとする、ユーモラスな伝説である。大きなおならが出るほど沢山の山芋を食べたことは、山の恵みが豊かであることを示唆している。

## 6. 天狗と寺院

### 6-1. 大天狗・杉の坊

赤城山には多くの天狗がいて、それを取り仕切るのは杉の坊という大天狗だという。

そして、「赤城山秘文」によると、鎌倉時代中期の弘安年間(1278年~1288年)の頃、世良田村(現 太田市世良田町)の長楽寺の法照禅師が赤城山に登ると、一人の行者の出迎えを受けた。行者は、30年以上も山にこもり、火食を避け、谷水を飲み、どんな寒さでも凍えることもなく、多くの霊力を備え、赤城の地神系の天狗を友としていた。行者は法照の弟子になり、了儒の法号を貰った。人々は行者を神のように敬っていたという。(太田市世良田町の伝説)

### 6-2. 天狗が建てたお寺

昔、法燈国師(ほうとうこくし)というお坊さんが中国・宋から日本に帰り、紀伊国由良の地に西方寺を建てた。ところが、その後何度も火事にあって寺が燃えてしまい、その度に建てかえるのは大変だった。

あるとき、一人の坊さんが通りかかって「火事になるのは、法燈国師(心地覚心)という寺を開いた坊さんの名前が悪い。法はサンズイに去る、つまり水がなくなり、燈は火へんに登ると書くから、火事にあうのだ。上野国にあるわしの寺を尋ねてくれば、一晩で建てかえてあげよう」と約束してくれた。

それで小坊主たちは、はるばる上野国の赤城山を目指して行くと、そこは、杉の坊という名前の大天狗のすみかだった。杉の坊は「よく来てくれた。約束通り、一晩で寺を建ててあげよう。ただし、その様子を決して見てはいけない」と言い、小坊主たちを紀伊国由良に帰した。

約束の日、小坊主たちは、村人に「灯りを消し、戸を閉めて、一晩中家からでないように」と頼んで回った。すると、一晩中、ガンガン、ギーコギーコと音がしていた。夜が明け村人がおそるおそる見てみると、何と七堂伽藍の立派な寺が完成していた。天狗達が夜通し作業して、興国寺を再建したのであった。それで、紀伊国由良の興国寺は「天狗の建てた寺」と伝えられている。(和歌山県由良町の伝説)

### 考察

伝説6-1の赤城山秘文の内容から、天狗研究者は、杉の坊が行者の化身ではないかと推定している。赤城神社元宮の社のそばの飛鳥社(ひちょうしゃ)は、天狗の社だったと伝えられ、上野国の歴史を書き記した「前上野史」にも、「飛鳥社(天狗を祀る)」と記載されている。

伝説6-2にある由良と同じ地名が太田市にある。戦国時代に太田の地域を支配していた由良氏は、鎌倉幕府を倒して建武の中興で活躍した新田義貞の流れをくむ武将で、太田金山に城を設けていた。

新田義貞は南北朝時代に後醍醐天皇を擁する南朝方につき、北朝側についた足利尊氏との争いに敗れた。この戦にあたり、新田一族は近畿、四国、北陸まで展開していた。新田義貞は越前(福井県)で戦死して直系は滅んだが、傍流の岩松氏が残り、その一族が後に由良氏を名乗った。

西方寺(現在名は興国寺)は1227年創建の古刹で、創建時の宗派は新田一族の菩提寺と同じ高野山真言宗であった。これらのことから、由良氏と関係の深い武将が紀伊国由良の地に根を下ろし、赤城山信仰を続けていた可能性がある。あるいは、羽柴秀吉軍によって焼かれた堂宇の再建に由良氏流の子孫があたり、その建築の早さから、赤城山の天狗が作ったのだとの伝説が生まれたのかもしれない。

なお、西方寺は1257年、後醍醐天皇から興国寺の寺号を受け、宗派も臨済宗妙心寺派に改宗して、現在まで続いている。法燈国師は虚無僧(普化宗の僧)4人を住まわせたので、普化宗・尺八の本山的な役割を持つようになり、その弟子の一人、虚竹禅師(寄竹)が尺八の元祖といわれている。また、国師は、宋で習得した径山寺(金山寺)味噌の製法を我が国に伝え、それが醤油誕生につながったという。

## 7. 流山市の流山

今から約750年前のこと、上総国あたりが豪雨に見舞われた。数日後、水がようやく引くと、高さが約15m、周囲約350mの小山が突如姿を現し、村人を驚かせた。この山は上野国の赤城山が崩れ、その一部が流れ着いたものである。(千葉県流山市の伝説)

### 考察

流山市内の小山頂上に建っている赤城神社境内にある赤城嗣碑には、『建長年間(1249～1256年)、大洪水によって上野国の赤城山が崩れ、その一部がこの地に流れ着いた。これが「流山」の地名の由来である』と記されている。

現在の利根川は銚子で太平洋に注いでいるが、江戸時代前期までは東京湾に注いでいた。流山のある上総地域はその下流域になっており、利根川の洪水にしばしば見舞われていた。1回の洪水で小山が本当にできたということは信じがたく、長年にわたる洪積台地の侵食過程で、一部が取り残されて小山として残ったと考えるのが妥当である。しかし、平野の中にポツンとある小山の成因を、利根川の上流にあって、関東平野に対峙して屏風のように聳える赤城山と結びつけたものであり、この地域における赤城山信仰を示す伝説といえる。

なお、流れてきたのは山ではなく、赤城山のお札だったともいう説もある。この伝説にちなみ、流山市付近を走る地方私鉄である総武流山電鉄の流山線では、かつて「あかぎ号」の愛称を持つ列車が2001年5月20日まで走っていた。塗装は赤城山にちなんで赤がメインで、白帯が描かれていた。

## 8. その他

### 8-1. 血の池

昔、赤城の原に老夫婦と一人娘が住んでいた。娘はたいそう綺麗だったので、言い寄る男が沢山いたが、娘はそれを嫌がり、「この空き地に井戸を掘り、もし水が出たら嫁になりましょう。」と言った。ある男が毎日休まずに掘って、ついに水が出ると分かったとき、娘は急死し、血がその井戸に入った。そこを血の池と呼ぶようになった。(前橋市富士見町の伝説)

### 8-2. すずり石

山口の北方にすずり石という大きな石があり、窪みに水がたまっている。昔、親鸞聖人が近くを通ったときこの水を硯に受けて経文を書いたので、すずり石と呼ばれるようになった。(前橋市富士見町の伝説)

### 8-3. 田島の大石

田島には天狗の足跡石というのがあ。天狗が飛んできて、この石に止まったと言われ、大きな足跡がついている。この石の上で子供が遊んでいて落ちて、けがをすることがないという。(前橋市富士見町の伝説)

#### 考察

伝説8-1の血の池は、赤城山頂の小沼の西にある直径が約70mの小噴火口跡で、活動したのは小沼とほぼ同時期と考えられている。普段水はないが、夏季に雨が沢山降ると水深1m程度になり、赤色のヤマヒゲナガケンミジンコが沼中に大発生して、水の色が赤く染まることある。山中の小さな窪地を井戸とし、季節によって赤色の水が堪るので、それが井戸掘りと出血の伝説になったのであろう。

伝説8-2のすずり石は、赤城南面広域農道(第2南面道路)沿いにある長さ3m、幅2m、高さ2mほどの巨石で、伝説8-3の田島の大石とともに、約20万前の大規模山体崩壊による岩屑雪崩で流れ下った岩が、取り残されたものである。ぽつんと置かれたような大岩については天狗や大男の伝説や、仏教の高僧と関係する伝説が多い。

#### 結論

赤城山に関する伝説は多岐にわたっており、ここではその中で主なものを紹介したが、古墳時代から中世(平安時代)の伝承が多い。それらを総括すると、この地域は比較的豊かであったこと、古代(おそらく古墳時代)に上毛野国(群馬県)と下毛野国(栃木県)と間でかなり激しい地域紛争があったこと、また会津国(福島県)、上総国(千葉県)、中世には遠くは紀伊国(和歌山県)とも交流があったことなどが示唆される。さらに、伝説の中にはこの地域の気象や地形と関連づけているものもあり、それらの内容から先史時代から長年にわたる赤城山麓の人々の生活や、周辺地域との交流をうかがい知ることができる。

### 参考資料

- 赤城山編集委員会(編)(1988):赤城山. 上毛新聞社, 前橋.  
赤城山ビジターセンター展示資料.
- 富士見村編(2009):富士見村120年の歴史. 富士見村役場, 富士見村.
- 萩原 進(1951):温泉伝説の群馬. 利根川民主新聞社, 前橋.
- 関東農政局赤城西麓農業水利事業所編(1998):赤城西麓—農業水利事業誌. 関東農政局赤城西麓農業水利事業所, 沼田.
- 栗原 久(2007):なるほど赤城学—赤城山の自然、歴史・文化—. 上毛新聞社, 前橋.
- 栗原 久(2009):なるほど榛名学—榛名山をとことん知ろう—. 上毛新聞社, 前橋.
- 栗原 久(2011):人々を楽しませる赤城山の魅力 1. 地形の概要と山頂における植生の特徴. 東京福祉大学・大学院紀要 **2**, 197-205.
- 梶谷 明編(1973):金の瓜—上州・利根の昔話. 桜楓社, 東京.
- 松崎 寛・保科久夫 監修(1998):伊香保姫物語 伊香保温泉伝説. 伊香保書院, 渋川市.
- 峰岸純夫・能登 健(1981):赤城山南麓の開発と遺構《女堀》. **URBAN KUBOTA 19**, 52-53.
- 谷川健一(2012):蛇 不死と再生の民族. 富山房インターナショナル, 東京.
- 都丸九一(1992):赤城山民俗記. 煥乎堂, 前橋.
- 丑木幸男・大正用水土地改良区(1983):大正用水史. 大正用水土地改良区, 前橋.

\* 文献の引用については、本文中に厳密に明示できないので、参考資料とした。

## Appealing Points for Enjoyment at Mt. Akagi 2. Traditions Related to Mt. Akagi and the Examination of Their Roots

Hisashi KURIBARA

Junior College, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),  
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

**Abstract :** Mt. Akagi is the most representative volcanic mountain in Gunma prefecture (ancient name: Kamitsuke-no-kuni), and it has been the object of religion for long period. Therefore, there are many traditions related to Mt. Akagi. Although the roots of these traditions have not been certainly determined, it is highly probable that they are based on the history and nature of the region around Mt. Akagi. The traditions examined in this article are related to the god of Mt. Akagi, giant and Japanese long-nose goblin, dragon and big snake, names of the place, weather, and relationships between Kamitsuke-no-kuni and other regions such as Shimotsuke-no-kuni (Tochigi prefecture), Hitachi-no-kuni (Ibaraki prefecture), Kazusa-no-kuni (Chiba prefecture) and Aizu-no-kuni (Fukushima prefecture). The life of people living in the region around Mt. Akagi and the incidences in the history from Kofun (Ancient tomb) era to Edo era can be recognized from these traditions.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

**Key words :** Mt. Akagi, Roots of traditions, Incidences in the history, Kamitsuke-no-kuni (Ancient name of Gunma prefecture)

